

語声調類型の手がかりとしての
九州アクセント実現形の揺れ

Tonal mobility as a clue to the word-tone type
in some Kyushu dialects of Japanese

児玉望 (熊本大学)

Nozomi Kodama, Kumamoto University

kodama@kumamoto-u.ac.jp

Donohue (1997) のニューギニア声調類型



プロトタイプとしての3類型

- a) 音節声調：1音節につき1声調
- b) 語声調：1音韻語につき1声調
- c) ピッチアクセント：1音韻語につき1有標音節(TBU)
 - ✓ 連続体的な中間領域や複合的な構成も可能

<問題点と提案>

- b)とc)は排他的に定義できるのか(例：鹿児島方言)
 - むしろ、音韻語内の特定の位置に「有標音節」をもつピッチアクセントに対して、音韻語全体に加わる声調の実現の「変曲点」の位置が可變的な類型として語声調を定義できないか。
- 「語声調」が音韻語の境界を定義できる
 - 「一型語声調」も定義できるのではないか

ピッチアクセントとしての東京方言

- アクセント核（有標モーラ）の位置の対立
 1. 「チェ]ーンだよ」 
 2. 「チェー]ン店だよ」 LaBrune (2012) の例
 3. 「グリ]ーンだよ」 
 4. 「グリー]ン車だよ」
- 東京方言にもLHL（有核）とLH（無核）のような音韻語の「メロディー」（語声調）を定義することは可能。
- ただし、有核の間で超重音節の2種類の下降は交換不可能。（少なくとも有核型は）音節未満の何か（モーラ）を単位(TBU)として、「有標TBU（アクセント）」の位置が固定した「ピッチアクセント」体系である。

ピッチアクセントとしての鹿児島方言？

cf. Ding (2006)

- 二型体系

- A) HL (葉) H\$L (鼻/葉が/中央) L\$H\$L (鼻輪) L\$L\$H\$L (中央高校)
- B) H (歯) L\$H (花/歯が/甲南) L\$L\$H (花輪) L\$L\$L\$H (甲南高校)

- 東京方言と異なり同じ語でも変曲点の変動があるが、これは、アクセントをもたない付属語が先行の語と共に音韻語を構成することによる（形態音韻論的に条件づけられた）実現形の変異である。
- 音韻語内部で1個の有標音節(H)の位置は固定した体系
 - なお、B型のHは、「句」の境界を隔てない場合、後続の音韻語のピッチより必ず高い。
L\$L\$H}!H\$L (東京のラーメン)
 - B型に「語末音節核」を仮定すれば、東京方言と同様な下げ核の位置の対立としても分析できる

鹿児島方言A型語末超重音節のピッチの揺れ

- 1音節A型は、音節の長さに関わらず常に下降調
 - a) ト HL 「戸、（準体助詞）」 トー HL 「十」
 - b) チェ]ーン～チェー]ン cf. チェーン店 HSL
 - 超重音節の下降調では連続体的な揺れがある
 - 末音節が超重音節の多音節語では、Hが次末音節でも、末音節下降調でもよい(上野 1992)
 - c) グリーン L\$HL ~ ?H\$L H↑\$L 「グリーン!?!」
- cf. グリーン車 L\$H\$L
- d) グリーンだった L\$HL}L\$!H ~ H\$L}L\$!H
 - f) ハネムーン L\$L\$HL ~ L\$H\$L
 - g) トロンボーン L\$L\$HL ~ L\$H\$L
 - h) ハイパーサルーン L\$L\$L\$HL ~ L\$L\$H\$L

鹿児島方言A型語末超重音節とイントネーション

- 強調的な末音節の延長とHの移動
 - a) シラーン ↑↑H\$L ~ L\$↑↑HL 「知らん!」
- cf. ワカラーン ↓L\$L\$↑↑H 「わからん!」
- 疑問イントネーションの句末下降
 - b) シラ(ー)ン H↑\$L 「知らん?」
- cf. ワカラ(ー)]ン L\$L\$↑HL 「わからん?」
- 呼びかけイントネーションの句末下降
 - c) コダマサ(ー)ン L\$L\$H↑\$L ~ L\$L\$L\$HL 「児玉さん!」
- cf. ヤマダサ(ー)]ン L\$L\$L\$HL 「山田さん!」
- 句末上昇イントネーション (呼びかけ・疑問)
 - d) コダマサーン L\$L\$H\$L(↑) 「児玉さん!」 グリーン
 - H\$L(↑) 「グリーン?」
- cf. ヤマダサーン L\$L\$L\$↑H 「山田さん!」

鹿児島方言A型語末の下降コントゥア

- A型語末音節が延長された場合には、HLの下降コントゥア傾斜を維持するいずれかの方略が取られる
 - HLの下降開始を遅らせる (L\$HL)
 - Hのピッチを上げる (H↑\$L) → イントネーション効果
- A型語末の下降コントゥア
 - a) 「ラーメン」 H\$L(↑) vs. H\$L(↓) 「ラーメン？」
 - b) 「榎」 L\$H\$L(↑) vs. L\$H}!H(↓) 「絵の木」
 - c) 「フロント」 L\$H\$L(↑) = L\$H}!HL 「風呂の(戸)」
- 「境界特徴」としてのA型語末下降コントゥア
 - d) L\$L\$L\$H\$L(↑)\$!H\$L 「熊本のラーメン」の(*↑)ラ(↓)
 - cf. L\$L\$H}!H\$L 「東京のラーメン」

境界声調弁別体系としての鹿児島方言

- 「語声調」としての弁別特徴(鹿児島方言)
 - 1音節 A型：(L)H\L B型：(L)H}
 - 2音節 A型：(L)H\$ \L ~ L\$H\L B型：L\$H}
 - 3音節 A型：L\$H\$ \L ~ L\$L\$H\L B型：L\$L\$H}
- N音節 A型：(L+)H\L B型：(L+)H}
 - 句の内部の音韻語境界に先立ちピッチ下降がある
 - A型： \L 最大1音節の下降 B型： }音節間下降
 - Hは可能であれば最大1音節の高平調で実現する
 - LからHへの上昇はイントネーションにより可変
 - ピッチ下降に後続する位置では、通常のアイントネーションではHへの上昇が抑制される(!H)。ただし、「しみじみ調」では先行位置で抑制。

語声調としての南九州二型アクセント

- 鹿児島方言以外の南九州二型アクセント（種子島、屋久島、トカラ列島、甕島、薩摩半島南西部）の先行研究
 - （「音節声調」としての）音節高低による型記述が中心
 - 調査者による食い違いが大きく、揺れに関する記述も多い。
- 談話資料（鹿児島県立図書館方言ライブラリ、NHK全国方言資料）の観察に基づく「揺れ」の要因の分析
 - 「音韻語」境界を示す特徴をもつ体系が多いが、語末以外にも弁別特徴があれば、鹿児島方言のA型/B型の境界実現2種($\setminus L, H$)が、自由変異として現れやすい。
 - 鹿児島方言のように、Hが1音節の高平調として現れる方言はむしろ例外的。「高平調連続+境界特徴」あるいは「上昇調から下降調への変曲点」として現れる方言が多い。

南九州二型語声調概観

- 「文節」がほぼ音韻語に相当する二型対立
 - 右境界のみで弁別
 - 鹿児島県本土主流
 - (L-)H\L (L-)H}
 - 甕島重起伏
 - (M/H\M-)H\L (M/H\M-)L/H ~ (M/H\M-)L{
 - 薩摩半島南西部重起伏
 - (H-)L/H} (H-)L{
 - 冒頭部声調と右境界で弁別
 - 屋久島主流
 - L/H\L-}, LH} L/H-} ~ L/H-\underline{L}, LH{
 - 種子島
 - L/H-} ~ L/H-\underline{L} L/H\L-}
- ※ L-, H- は可変長の平進(L+/,H+\\)、コントゥア(L<,H>)、頭部卓立(HL+)など。

例1：旧上屋久町宮之浦方言の語声調

- 金田一類別 A型(1/2) : H\$ L(\$L) B型(3/4/5) : L\$ H(\$L)
 - 二型とも「助詞が低接する」二型アクセント？
金田一(1954)
- 語声調 A型 : L/H\L> B型 : L<H} ~L<H\L
 - 1音節 L/H\L ~L/H}
 - 2音節 L/H\$ \L L/\$H} ~L/\$H \L
 - 3音節 L/H\$ \ \$ \L L/\$/\$H} ~L/\$/H\$ \L
 - 音節数が増えると揺れても弁別維持が可能
 - A型の(連続的)揺れ : L/H\$ \L\$> .. ~L/\$H \L\$> ..
(音節数が増えると、頭の2音節が高い印象)
 - 他の屋久島諸方言では、頭音節が短い場合にL/Hが2音節で実現するのに対し、宮之浦では1音節で実現することが多い。





宮之浦方言の揺れ（全国方言資料）



- B型 \L~H}

アメ「雨」 L/H}  L/H\L 

アメ+助詞 L<H}  L/H\L 



(~アメ・下降) L_!H} 

多音節助詞L<H\L フロデモ「風呂でも」  オヤコナガ「親子ながら」  イマカラモ「今からも」  ニサンチウチ「二三日中」 


助詞なし L<H\L ナナジューエン  タマガル 



助詞付き L<H} タビョ(足袋)  ヤマジョイ(山草履) オ 


- A型 L/H\L の2音節への実現

ア(一)メ 「飴」  ミ(一)ル 「水」 

タタミ「畳」  サバツイ「鯖釣り」 

トツビョトイ 「飛魚取り」 





ニジューエン 「二十円」  トマイコンジ「泊り込んで」 












フタイナガ「二人ながら」 

例2：南種子町島小平山方言の語声調

- 曖昧アクセント？ 平山(1969)
 - 西之表、中種子は、木部(2000)が対立と揺れを確認
- 語声調 A型： $L/H+\}$ ~ $L/H+\backslash L$ B型： $L/H\backslash L+\{$
 - 1音節 $\underline{L/H}$ $\underline{L/H}$
 - 2音節 $L/\$H\}$ ~ $\underline{L/\$H\backslash}$ $L/H\$L\{\sim\underline{L/\$H\backslash}\}$
 - 3音節 $L/\$H\$H\}$ ~ $\underline{L/\$H\$L\backslash}$ $L/H\$L\$L\{\sim\underline{L/\$H\backslash}\}$
 - 連文節環境では境界特徴により対立が実現するが、単独の発話では、Hのコントゥアのような微妙な違いのみとなる場合がある
 - 長い音韻語では、A型の末尾の下降が複数の音節にわたる可能性がある（西之表市、中種子町）

島小平山方言の境界表示と揺れ

- アメオ(A)}カーニ(A)}イケバ(A) ヨー 
- 「飴を買いに行けばよ」 L/H+\L}L!H+\L}L!H+ %/ %LHL
- テンキモ(A)}ヨ]カゴト(B){アイカラ(B)=ヨ 
- 「天気もよさそうだから」 L/H+}L!HL+{
- ロ]ガン(B){ジャッタ(B){カー 「どうだったか」  

- 第2音節が長い語
 - A型 L/\$H\$\L キレーニ「きれいに」   
 - B型 L/H\$\L{ シンパイ「心配」  
 - L/\$H\{ ハンブンニ「半分」  
 - ヒトーツモ「一つも」  B型強調
 - 音節構造による揺れ マゴ(η[o])ジョ「孫が」  
 - ム\$カシ\$ノ「昔の」 L/H\L 

南九州二型語声調：まとめ

- いずれの体系も、変位の問題になるのではなく、音韻語全体としての声調コントゥアによって対立が実現される語声調である。声調対立が実現できる限り、声調変位の問題は可變的でありうる。
 - 核の位置の移動を根拠とする通時的變化の仮説は、これらの諸方言については再考が必要であり、「声調變化」のモデルが求められる。
 - これらの語声調や「一型語声調」は、核の位置による対立を失った体系であるのか、獲得しなかった体系であるとみるべきかが大きな問題である。
 - 後者であれば、二型アクセント以外に位置の対立に拠らないアクセント弁別体系が存在するかどうかの確認が重要である。（隠岐3型、対馬方言）

参考文献

- Ding, Picus Sizhi (2006) 'A Typological Study of Tonal Systems of Japanese and Prinmi: Towards a Definition of Pitch-accent Languages' *Journal of Universal Language* 7. 1-35.
- Donohue, Mark (1997) 'Tone Systems in New Guinea' *Linguistic Typology* 1.347-386
- Labrune, Laurence (2012) 'Questioning the universality of the syllable: evidence from Japanese.' *Phonology* 29. 113-152.
- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究篇』167-209, 明治書院.
- _____(1992)「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」国広哲弥(編)『日本語イントネーションの実態と分析』(科研費報告書: No. 03208112) : 91-208.
- 上村孝二(1966)「屋久島方言の研究-音声の部」『鹿児島大学法文学部文学科論集』2.35-60.
- 木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 金田一春彦(1954)「対馬 附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店

参考文献

平山輝男(1969)『薩南諸島の総合的研究』明治書院

児玉望(2013)「種子島二型アクセントの境界特徴－自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語学論集』12.31-50.

___(2012a)「屋久島の二型アクセント－自発談話音声資料の分析」『音声研究』16-1.119-133.

___(2012b)「甕島の二型アクセント－自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語学論集』11.47-66.

___(2011)「日本語諸方言の韻律境界と領域」『ありあけ 熊本大学言語学論集』10.pp.1-26.2011.3

___(2010)「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『ありあけ 熊本大学言語学論集』9.1-28

___(2008)「曲線声調と日本語韻律構造」『ありあけ 熊本大学言語学論集』7. 1-40.

日本放送協会編(1981)『カセットテープ 全国方言資料』第6巻 九州編, 第9巻 辺地・離島編 III 九州, 日本放送出版協会. (1959-1972年にソノシートで刊行, 1999年CD-ROM化)